

『今月の天候と農作業』

通巻第5648号
2月号
令和3年2月4日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

寒気の影響を受けにくく、暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間のはじめはかなり高くなる見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 2月6日(土)～ 2月12日(金)

期間の前半に高気圧に覆われて晴れる日もありますが、前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、6日と期間の後半に雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 2月13日(土)～ 2月19日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 2月20日(土)～ 3月5日(金)

低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 播種と出芽

浸種は発芽揃いを良くするために水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度と十分に行います。10℃以下の低温を避け、夜間の冷え込みにも注意します。浸種後、催芽を30℃～32℃で24時間行います。

播種量は、稚苗では1箱当たり催芽粃180㍑程度です。苗立枯病等の防除を兼ねてかん水し、覆土は粃が隠れる程度とします。

段積みでの出芽は、地面と箱の間に隙間をつくり、積重ねは十段程度とします。平置きの場合は温度が上がりにくいので加温します。温度は28～30度で、出芽長は床土面から5～10㍑とします。

2 緑化と硬化

緑化は、寒冷紗等で3日程遮光し、本葉1葉目が展開し2葉目が抽出するころまで行います。温度は昼間が25℃以下、夜間は15℃以上を保ちます。苗の第一葉鞘高（腰高）を4㍑以内とします。

硬化では、前半は温度が昼間は20℃以下、夜間は10℃以上を保ち、後半は外気にならします。かん水は床土温度を下げないよう午前中に行います。

中苗や成苗では、播種後20日目と30日目頃に液肥を散布し、散布後は軽くかん水して葉焼けを防ぎます。

3 ジャンボタニシの対策

冬期の耕うんは、土中で越冬しているジャンボタニシを破碎します。ロータリー耕は回転数を上げ低速で行います。

◆ムギ類

気温が高く、生育が早い可能性があるため、管理が遅れないようにします。

1 穂肥

平年は早いところで、月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10㍑当たり窒素成分で2・5㍑、加里で2㍑程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があり、麦が節間伸長期に入る前までに行います。排水対策はほ場の周囲や条間に作溝します。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

低温時期のため日中の温度確保と、内張カーテンの開放による光線確保により光合成を促進します。また、内幌カーテンの開閉は、ハウスの上部の空気が十分に暖まってから数回に分けて行います。同時に、植物の結露が多い場合は、早朝加温や谷換気などの設定条件の見直しが必要になります。

徐々に日射量も増え、最低気温も徐々に高まるため、加温機の稼働時間が短くなり、ハウス内湿度の上昇に伴う病害の発生が多くなりますので、夜温の高い日は内張カーテンの調節により、適度に加温機が稼働するようにします。また、収穫までの日数も短くなり、着果量も増えてくるので、追肥とかん水量を増やしますが、1回の量を増やさず、かん水間隔を短くするなど、こまめな管理を行います。

◆きゅうり

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいので、開花や収穫果の位置（生長点から3～4節目で開花、10節目前後で収穫できるのが理想）に注意します。開花節位が上がった場合には、強めの摘果を行うとともにかん水量を増やして、草勢維持に努めます。

◆ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝も伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。

◆トマト

果実肥大と着色促進及び食味向上のためには、日射量の確保と葉数確保が必要となりますので、日中の内張カーテンの開放と15～18枚程度の葉を確保します。早朝の結露で裂果が助長されるため、早朝加温や換気による除湿を行います。

◆いちご

曇天が続くと成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下が懸念されます。曇天が続き、日中温度が上がらない場合には、着色促進のため夜温をやや高めに管理します。また、大玉果、食味向上のため裾玉に摘果します。今後、ハダニが増加しやすい時期になりますので、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆畦立てマルチ

これから播種や植付けを行う品目の発芽や活着促進には、地温と土壤水分の確保が重要です。マルチングする時はほ場の土を片手で握り団子になる程度の土壤水分を目安とします。逆に手が濡れる状態は水分過多なので、適湿になるのを待って耕起します。この適度な土壤水分状態は、土壤消毒剤（くん蒸剤や粒剤）や除草剤の効果が最も高くなる状態です。

◆食用かんしょ

来月にかけて、トンネル栽培の挿苗時期となります。採苗10日前頃から育苗ハウス内の苗は外気温に慣らしながら管理し、徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げます。一昨年からのかんしょの地際の茎の枯れや芋の腐敗などの症状が発生しています。発病苗をほ場に植え付けてしまうことにより、病気の発生を上げてしまう恐れがあるため、育苗床での発病株の早期発見と抜根、持ち出しが重要になります。苗床に入る際は靴底の土汚れを落とします。苗を切り取る高さは地際から5cm以上離し、切り取った苗は病害防止のため薬剤処理をします。調整後の薬剤は日光や汚れなどで分解しやすいので

一日を目安に使い切ります。苗は適湿・適温を保ちながら数日間取り置きすると挿苗後の活着が良くなります。定植予定のほ場は、十分な地温確保のため前日からトンネルを密閉して地温確保（18度以上）に努めます。地温が低く、苗が徒長しているなど条件が悪いほど活着が遅れ、株当たりのいも数が減りやすいので注意します。

◆さといも

早生品種の植付け時期です。連作障害が出やすいため最低4年はさといも栽培を休んだほ場を選び、センチュウ対策で土壤消毒を行います。種いもは病虫害や芽つぶれ等のない健全なものを選び、大きき順（30～50g程度）に揃え、種いもの表面に付着している土を洗浄し、水に浮く種いもは廃棄した上で、センチュウや乾腐病予防の薬剤消毒を行って植付けます。定植予定ほ場の周辺に前年のさといもがある場合は、早めに片付けます。残さの分解にはトラクター速度を遅く、ロータリー回転を速くし、できるだけ細かく破碎します。堆肥や微生物資材を施用し、残渣の分解を促進します。また、種芋選別等で出た残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

（川崎 佳栄）

果樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。

これから暖かくなり、過熟やウルミ果の発生が懸念されますので、ハウス内の温度管理に気を付けます。昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意します。完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、過度の積み重ねを避けるなど、丁寧に扱います。

◆マンゴー

気象庁の3ヶ月予報によると、2～4月の平均気温は平年並または高い確率が高くなっています。そのため、早期出荷作型ではあざ果の発生に注意が必要です。早朝や日の出後に果実結露が生じないように、ヒートポンプの除湿設定やこまめな早朝換気により湿度を低く保ちます。また、果実が5割以上になったら、結果枝2～3本当たり1果に結果数を調整します。

後期出荷作型のうち、特に剪定が遅かった園では生育にばらつきが見られています。これから開花期を迎えますので、早朝換気や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ち、花の時期から軸腐病などの発生をしっかりと抑えます。花穂はひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。

2 果樹全般

◆有機質の投入と土壤改良

果樹栽培において高品質・高収量を得るためには、土壤の通気性の確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壤の通気性の改善を行います。

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壤分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整します。

（鈴木 美里）

花 き

◆電照ギク

2～3月出荷の作型は最も暖房コストがかかる作型です。それぞれの品種、系統に適した変夜温管理を行い、コスト削減に努めます。

また、施設の多層被覆によりハウス内の湿度が高まると、白さび病が発生しやすくなりますので、換気除湿や循環扇の活用、定期的な予防防除などを行います。

◆スイートピー

日長時間が徐々に長くなって蒸散量が増加し、株の成長に従って養分要求量も増加しますので、かん水及び施肥を遅滞なく行い、草勢低下を防ぎます。

これからの時期は「花シミ」が発生しやすくなります。「花シミ」の発生原因のは大半が水滴なので、循環扇の利用や換気除湿等により「花シミ」軽減に努めます。

併せて、灰色かび病対策として、生物農薬のダクト散布も継続して実施します。

◆ホオズキ

2月は地下茎の植え付け時期となります。

ネコブセンチュウや白絹病等の病害虫をほ場に持ち込まないよう、十分に注意して地下茎の選別・調整を行います。なお、必要に応じて植え付け前に地下茎の消毒を行います。

◆デルフィニウム

沿海地域では、2番花の収穫期から3番花の萌芽期になります。

ボリュームを確保するためにも、適正な仕立て本数に整枝します。また、下旬頃からうどんこ病の発生が多くなりますので、発生前から定期的に予防防除を行います。

◆トルコギキョウ

天候不順時には、ブラスチングやチップバーンの発生しやすくなります。

適正な温度管理に加え、不要な枝や蕾の摘除、生育後半の過剰施肥の回避、カルシウム剤等の葉面散布で発生の軽減を図ります。

◆ラナンキュラス

収穫量が徐々に増加してきますので、草勢低下防止のために、窒素成分で150ppm程度の濃度の液肥を定期的に施用します。

また、ハウス内温度が低すぎると、光合成量の減少により回転が悪くなって収量に影響しますので、日中の温度管理は15℃程度を目安にします。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

令和3年1月25日時点で、鳥インフルエンザが県内6市町で9例発生し、全国でも本県を含む16県で39例発生しています。また、県内に飛来する野鳥の糞便からもウイルスが確認されており、

養鶏場への侵入リスクが高い状況が続きます。その他の家畜伝染病についても、ウイルスが伝染しやすい気象条件となることから、農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準を遵守します。

◆家畜

先月同様、寒さが厳しく、乾燥する時期になります。

幼畜は、寒さや温度変化に特に弱いため注意が必要です。適切な温度管理と換気を行います。

子牛は、寒さに弱い風が牛体に直接当たらないようコンパネやシート等で防止するとともに、コルツヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策を実施します。また、この時期は、牛舎内の温度維持のためカーテン等で牛舎を閉め切ることが多くなります。アンモニアガス等が溜まると呼吸器病等の蔓延につながりますので、換気に注意します。

子牛の腹部は濡れた状態だと疾病を発症しやすくなりますので、敷料をこまめに取り替える等、床は常にきれいで乾燥した状態にします。

◆飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの生育期になります。翌月から収穫作業等が始まりますので、飼養管理に影響がでないよう計画的な作業ができるように収穫機械等の点検を行います。

(大山 佐喜子)

特用作物

◆茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶を始め二・三番茶の収量品質向上に重要な肥料で、2月上旬頃から施用します。2～3回に分けて施用するとより効果が高まります。肥料の種類や散布量は地区の基準に準じ、畦間全面に幅広く散布します。施肥後は根を傷めない程度に軽く攪拌します。樹勢の低下が認められるほ場では、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢回復に効果的です。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃が目安です。平坦地では2月中旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶摘採期の集中を避けるため、品種の早晚生や地域の微気象等を考慮し整枝時期を調整します。その際は、整枝直後に急激な低温に当てないように天気予報に注意します。

整枝の高さは、葉層を8センチ以上確保した上で、最終摘採位置から3～5センチ高い位置としますが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝します。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要となります。計画的に防霜ファンやスプリンクラーの点検・整備に取り組み、防霜に万全を期します。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる二月下旬～三月 上旬頃です。地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。散布前までに、春整枝と裾刈りを済ませておくことより防除効果が高まります。

(松尾 啓史)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、暖かくなると害菌の繁殖も強力となるため、遅くとも3月中旬までには終わらせます。

仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ、初期活着を促進する作業です。菌糸の活着・伸長に必要な温度と湿度を保つ必要があります。本県では、地際から50～60㎝以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で直射日光や風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして保温・保湿を図ります。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めます。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取します。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵します。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は、子床管理と施肥畦立が主な作業となります。苗の良否が本畑植付以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めます。

1 苗床肥土は排水・通気性・水もちが良く、病害虫が発生しない、良質な肥土を使用します。

仮植は、葉数五枚苗（米粒大までの葉数）で、根張りの良い苗を植えます。活着までは床面が乾かない程度にかん水を行い、活着後は夕方床面が少し乾く程度にかん水をやや控えめにして、病害発生や根腐れ防止を図ります。また、苗床が高温多湿にならないよう温湿度調整（管理温度は20～25度）を行います。

本畑植付十日前ぐらいからは、苗の根張りを促進するために、換気とかん水制限をして順化処理を行います。

2 畦立は、ねり畦防止のため、土壌水分に注意して行ないます。また、根張り促進のための地積確保と、排水対策も含めて30cm以上の高畦にします。

被覆は早作早進のため透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等必要に応じてシルバーマルチを活用します。

3 春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に則って最善の注意を払います。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害虫全般	—	いずれの病害虫も、多発してからでは防除効果が劣るので、発生初期の防除を徹底します。また、薬剤抵抗性害虫および耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます（ローテーション散布の徹底）。 多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。各種病害の罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病	やや多 やや多 並 やや少	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	並 やや少	黄化えそ病の感染株は、速やかに根ごと株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最低でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、改植時には粒剤や灌注剤等による防除を行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	並 やや多	斑点病は多湿条件、うどんこ病は乾燥条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ ハコナジラミ	やや少 多 多	ヒラズハナアザミウマの発生が多くみられます。主に花の中に生息していますので、薬剤防除は、薬液が花の中にしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。 タバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 疫病	並 やや多 並 並	いずれの病害も多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風機を稼働させるなど除湿に努めます。
	ハコナジラミ トマト黄化葉巻 病 (TYLCV)	やや多 並	TYLCVを媒介するタバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるため、根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除を徹底します。
	ハダニ類	やや少	ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、天敵や物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
	オンシツコナジラミ ヒラズハナアザミウマ	やや多 やや少	オンシツコナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。 ヒラズハナアザミウマの果実への加害は、例年3～4月以降に顕著に認められますが、低密度時から青色粘着板による誘殺などの防除対策を講じましょう。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。 2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、 http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。			